Photo-Report
AbareMatsuri
July 2-3,2010

あばれ祭 2010

八坂神社（宇出津）の祭礼「あばれ祭」は 7 月 2、3 日両日に開催され、能登のキリコ祭りのシーズン到来を告げた。初日の夜は、役場前「宇出津港いやさか広場」で 40 数本のキリコが大松明の周りを乱舞。二日目は 2 基のあばれ神輿が道路や川、境内で大暴れしながら八坂神社に入り宮した。

数ある能登の祭りの中でも勇壮な祭りとして知られる「あばれ祭」の特徴や意義は―。45 年前、宇出津祭礼委員会が発刊した一冊の貴重な資料を基に「あばれ祭」の本質に迫る。

あばれ祭の起源

あばれ祭の由来や本質を明らかにしたい――。1965（昭和40）年、宇出津祭礼委員会の熱意が民俗学の権威・小倉学博士を動かした。小倉博士は他事を投げ打って調査研究を行い、あばれ祭の歴史をひもといた。

能登半島「宇出津のキリコ祭り」
小倉学著 / 宇出津祭礼委員会発行
（昭和 40 年）

宇出津の八坂神社

須佐之男命（すさのおのみこと）とその后神（きさき）の奇稲田姫命（くしいなだひめのみこと）の二柱をまつる八坂神社は、カンノジ山のふもとに鎮座する。須佐之男命は天照大神（あまてらすおおかみ）の弟神で、高天原（たかまのはら）から出雲国にくだって八岐大蛇（やまたのおろち）を退治し天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）を得て奇稲田姫命と結婚。出雲国開発の祖神となった勇武の神で、牛頭天王（ごずてんのう）と習合し平安時代に京都の祇園社にまつられてから厄除神・防疫神として広く崇敬された。

古来、カンノジには観音寺と呼ばれる古寺が鎮座していた。安永6年（1777年）の『能登名跡志』には　**元観音寺とて、町野への行往来の谷内にあり、今は寺なく、観音塚と云也、（中略）**　と記され、さらに　**今は六月七日祇園会の御旅所也、**　と述べられている。

安永のころ、カンノジには八坂神社はなく、祭礼時に御旅所として神輿が渡御して神事を行っていたことが分かる。

八坂神社の旧社地は、昭和町の町端家（通称アメヤ）と考えられている。伝承によれば、アメヤの先祖がカンノジの神様（八坂神社の神）を海から拾い上げて奉祀したのだという。それを裏づける行事が今も行われている。

祭礼一日目の朝、白山方の神輿は八坂神社での祭典のあと、真っ先に町端家に向かい、神事をしてから氏子町内へ渡御する。二日目の夜も梶川で暴れたあとに町端家に向かい神事を行う（写真右下参照）。昭和町のキリコの浮字「是神洲」の三文字は、ここに旧社地があったことを記している。

祭り二日目、梶川をあがり昭和町の町端家（アメヤ）に向かう白山方の神輿（H21 年撮影）

八坂神社社殿。古くは祇園社・祇園宮・牛頭天王社と呼ばれたが、明治に入ってから八坂神社に改められた。現在八坂神社奉賛会によって管理されている。

あばれ祭の由来

八坂神社の創立とあばれ祭の起源について「昔、泥棒風と呼ばれた悪疫が流行、住民の病死するものが続出して悲惨この上ないありさまだった。当時、宇出津に在住する十村の桜井源五が、これをいたく憂え、京都の祇園社から牛頭天王を勧請して盛大なる祭礼を始めた。その時、大きな蜂があらわれて住民を刺すのであったが、不思議なるかな、住民はたちまち快癒した。この蜂こそ神霊の化顕であると霊威をかしこみ、大きなキリコを作って

大泥棒ボー　蜂やさいた。

とはやしつつ練り回ったところ、悪疫はことごとく絶滅するにいたった」と伝承されている。

しかし、宇出津は古くから港町として栄えた地であり、夏にはたびたび疫病の流行もあったであろうと考えると、伝承より以前に牛頭天王を防疫神としてまつってきたことも推測される。

臨時的な神事を行ってきたところに、十村の源五が社殿を造り、神事祭礼を盛大に行い、今日の八坂神社の基礎をつくったと考えることもできると小倉博士は資料の中で述べている。

墓碑は風化してほとんど消えているが、右側に初代源五が亡くなった「延宝四年」（1676 年）と残る。あばれ祭直前の 6 月 29 日には、祭礼委員や神輿の担ぎ手ら 12 人が源五の墓を参った。

十村の桜井源五

あばれ祭をはじめたとされる十村の桜井源五。十村とは大庄屋に相当するもので、数十村を合わせた組を支配していた。

初代の源五は、明暦元（1655）年に柳田村へ十村として移り、23村を支配。10年後の寛文4（1664）年に宇出津村へ移転し、延宝4（1676）年に病死した。その墓は、海前寺（宇出津）にある。3代、5代と源五を名乗るが、初代源五は傑物として知られ、あばれ祭をはじめた源五は初代源五だと考えられている。

宇出津祭礼委員会は、1664年に初代源五が宇出津に来たことを考え、昭和40（1965）年にあばれ祭の三百年祭を盛大に行った。

祇園祭りの能登版

日本各地に広く見られる祇園祭りの系統に属するあばれ祭。その最大の特徴は、単純に祇園祭りを模倣したものではなく、能登地方の夏祭りとして知られるオスズミ祭り（納涼祭）の形態、つまりキリコや柱松明などを加えて「祇園祭りの能登版」を作り上げたこと。この特徴が、全国に類のない祭礼として大きく注目を集める理由となっている。

45年前のあばれ祭

資料「宇出津のキリコ祭り」には、祭りの行事だけではなく、祭礼委員会や町内の経費、キリコの構造や浮字・町紋についてなどが詳細に記述されている。45年前から変わった部分、変わらない部分がある。その変遷とあばれ祭の特徴をまとめた。

名称と祭日の変遷

この祭りは、夏の夜にキリコ40数本が笛・太鼓・シャギリのはやしで練り回ることから、古来「キリコ祭り」と呼ばれてきた。

戦後、キリコを担いで回る時のはやし言葉「イヤサカサッサ」から「いやさか祭り」と呼び、昭和32年ごろから「あばれ祭」と呼ぶようになった。その名のとおり、神輿が大暴れするからだ。（石川県無形民俗文化財には『宇出津のキリコ祭り』として指定されている）

あばれ祭は、臨時的に行われていたものが次第に恒例化して6月7日に行うようになり、明治以後は7月7日になった（現在は7月第一金・土曜日）。旧暦6月7日は夏季で、悪疫の流行しがちなころ。この時期に疫神をなごめて厄災を除き、幸福と平和を祈願した。

宇出津のキリコ

宇出津のキリコの特徴は①舞台が大きい②小形（高さ5～6㍍）③ナカフクの浮字と町紋④彫り物―などがある。

キリコはかつて、五間半（約10㍍）くらいが普通だったが、大正3（1914）年、宇出津に電灯がつき電線が張り巡らされてから小形化。このとき、廃灯運動が起こり、「廃灯何々」と書いたナカフクだけをワク台にのせて担ぎ回ったという。巨大なキリコは、当時宇出津沿岸で漁をしていた石崎（七尾市）の漁師に売り払ったと言われている。

かつては後方に太鼓幕があり、この幕が春の曳山に飾る人形の背景を飾った。

①棚木づめ（新村通り）の様子。キリコが入り乱れるのは今も昔も変わらない。
②父親が子どもキリコを飾り付ける。
③キリコのふき掃除をする子どもたち。
④町内を回った神輿を清めるため御旅所付近で海に投げ入れられる酒垂方の神輿。
⑤入り宮の道中、新町通りで暴れる神輿。早く行け、まだ早いともみ合いを続けるシーン。神輿はロープに縛られ、やっと形を保っている。
※写真はすべて「宇出津のキリコ祭り」から

子どもキリコ

宇出津では、男子が誕生するとお祝いとして小さなキリコを作る慣習があり、7月の祭礼が近づくと子どもたちはこれを担ぎ出して楽しんでいた。

昭和30年ころから、子どもキリコを統制して7月1日から5日まで担がせることにした。5日の夜には小学校に約150本のキリコが参集し、グラウンドを一周してから八坂神社まで行った。

祭り数日前にキリコを神社や寺などから運び出し、ふき掃除をするのも子どもたちの仕事だった。

松明おこし

あばれ祭における柱松明の役割は大きい。波止場（現在の役場前）の広場に3本。これは昭和25年に宇出津港祭りをしようと始まった。この松明は浜小路の町内がたてていた。

梶川上流には2本。1本は古くから新村3町内が1年交替でたて、さらに上流の1本は、昭和5年ころから酒垂神社の依頼で漆原・梅ノ木の若衆がたてていた。

松明に使うシバは、古来から漆原の旧家である彦次郎家からもとめる慣習が続き、当時もその新宅あたりから購入していたという。

あばれ祭は、八坂神社の年に一度の例祭日。一日目朝の祭典後、白山方、酒垂方の2基の神輿が氏子町内を渡御して一泊、翌日深夜に入り宮する。もとは神輿が1基で約1週間ばかり町内を巡行していたが、日数を要するというので現在のように2基の神輿になったという。

キリコの運行も現在とほとんど変わらない。一日目が棚木海岸に向かう「棚木づめ」と大松明での乱舞。二日目は入り宮する神輿のお供をする。

あばれ祭の意義

「宇出津のキリコ祭り」で小倉博士は、祭りの意義をこう記している（以下原文のまま）。

『この祭礼が宇出津全町をあげての行事とされ、全町民の盛り上がる熱意によって年ごとに盛大となりつつあることも特筆大書しなければならぬ。祭りは人の心を鼓舞する霊力を有する。一年一度の、この祭礼を期として若々しい血潮をたぎらせて明日への活動に備えようとするところに大きな意義が存する。

また思うに、盛大な祭礼は、【人の和】のないところには実現されない。この祭礼を期として宇出津全町の和をはかり、躍進宇出津の向上発展に努力するならば、宇出津キリコ祭りの、さらに大きな意義が発揮されるであろう』

あばれ祭が歴博へ

あばれ祭が、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）で平成25年3月から常設展示される。祭礼関係者は、展示準備を後押しするために常設展示支援実行委員会を組織。展示内容の充実に向けて全面的に協力している。実行委員長の浜中喜一さんと歴博准教授松尾恒一さんにあばれ祭への思いを聞いた。

あばれ祭の歴史を知ってほしい―。

八坂神社奉賛会会長
常設展示支援実行委員会委員長

浜中喜一さん

はまなか・きいち（新村浜町）

―浜中さんにとってあばれ祭とは。

宇出津に生まれ、シャギリを覚え、太鼓をたたき、キリコを担ぎ、神輿を担ぎ、祭礼委員長、そして八坂神社奉賛会会長となりました。あばれ祭はわたしの人生そのものと言えるかもしれません。

あばれ祭は八坂神社の祭りですが、八坂神社には氏子があってないようなものです。八坂神社を守ることはあばれ祭を守ること。奉賛会として、宇出津の皆さんと共に八坂神社を守っていきたいと思っています。

わたしは、今の祭りを支える若い人たちに祭りの歴史や意味を知ってほしいと思っています。八坂神社について、桜井源五について、なぜ神輿がアメヤに行くのかなど、それを知ることでもっと祭りの本質に近づくことができると思っています。

―国立歴史民俗博物館の常設展示は。

展示に協力してあばれ祭を全国に発信しようと、宮司や氏子総代、祭礼委員会などのメンバーで支援実行委員会を組織しました。八坂神社奉賛会の会長ということで委員長になりましたが、委員はもちろん、地域の皆さんの協力なくしては支援していくこともできません。八坂神社の祭りをできるだけ多くの人に知ってもらうために、皆さんの理解と協力をお願いしたいと思います。

―桜井源五の墓を参ったそうですが。

45年前の資料には源五の墓のことが出ていましたが、わたし自身は墓があるということを知りませんでした。それで今回、祭礼委員会や担ぎ手に声をかけて祭り前に墓参りをしたんです。若い人は知らない人が多かったですね。

神輿を荒々しく扱うことが『祈りの作法』

―国立歴史民俗博物館とは。

歴史上の偉人や政治よりも、民衆の生活や文化の歴史、その伝承に重点をおいて展示をしている国立の博物館です。今回、開館より20年を超えて、常設の民俗展示室のリニューアルを行うことになり、その中であばれ祭を展示することが計画されています。平成25年3月にオープンする予定ですが、現在まで宇出津の皆さまのご協力もあって順調に準備が進んでいます。

―なぜあばれ祭が選ばれたのか。

あばれ祭は、新しい民俗展示室での「恐れと祈り」という、信仰に注目しながら日本人の一年の生活を考えるコーナーで取り上げられます。一年の節目となるのは言うまでもなく正月ですが、正月はもちを食することから分かるように、稲作に深く関係しています。

もう一つが夏に多く見られる山車や神輿の祭礼です。その元来の目的は夏にはやりやすかった病気をはらう祈りにあります。その起源は、病気の原因とされる疫神をつかさどる牛頭天王の祭りで、京都の祇園祭りが最も古く平安時代に始まり、そこから全国に波及していきました。博多や小倉、会津などをはじめ各地に特色ある祇園祭りが見られます。

夏の特徴的な行事のもう一つが「燈籠」の登場する祭りです。青森県のねぶたは、張り子の巨大な武者などの人形で知られていますが、江戸時代には箱形の燈籠で、これが変化していったものです。

このように見てくると、宇出津のあばれ祭は、病気をはらう祈りである祇園祭り系の祭礼であると同時に、ねぶたのような巨大な人形に発展する以前の、素朴な箱形をした燈籠の祭りであることが分かります。これが宇出津のあばれ祭に注目した理由です。

あばれ祭では神輿を荒々しく扱いますが、神輿が壊れれば壊れるほど、神輿に乗る神様が喜ぶとも言い伝えられており、それが「祈りの作法」なのだと認められるように思います。一般的な「祈り」という言葉からイメージされるような、心に念じる静かな祈りとは違う、集団の荒々しい力によってなされる祈願というものがあったことが注目されます。

神霊にはたらきかける作法として、揺らしたり、たたいたりするというのは、古代より見られますが、あばれ祭での神輿の作法は、それと関連するものではないかと感じます。

宇出津のあばれ祭には、日本人が古くより行ってきた、信仰に基づく特徴的な作法が伝えられているのです。

―実際に祭りを見られて。

映像では見たことがありましたが、通して見たのは去年が初めてでした。実際に目にして、とても感動しました。

より一般的、多くの祭礼においては、神輿は神聖なものであり、地面に直接置かれることはありません。それが地面にたたきつけたり、境内にたかれた火に投げ込まれたりするのを目の前に見ていると、事前にそうすることを知っていてもびっくりしました。20年以上、全国の祭りを見て回っていますが、その中でも特に印象に残る祭りになりました。

また実際に見て感じたのは、地域をあげての行事だということです。子どもからお年寄りまでそれぞれに役割をもって、一つの祭りができあがる。それによって各世代の交流が自然なかたちでできるのではないか。それぞれの世代が、自分の上の世代、下の世代いずれをも尊重する気持ちが生まれてくるように感じますが、そうした点でも貴重な文化伝承だと感じました。この貴重な文化をこれからも、青年を経てやがて大人になる子どもたちに伝承していってほしいと思っています。

―展示内容はどのように。

壁いっぱいの写真と映像を背景に、ほぼ原寸のキリコと、祭りが終わったあとの壊れかかった神輿を展示して、祭りの激しさが伝わるようにと考えています。昨年は太鼓、鐘、笛などのはやしの楽器を作りました。本年度は映像を制作し、それとキリコの彫り物の部分を作ってもらう予定です。来年度に神輿、24年度にはキリコを作っていただき、25年3月にリニューアルオープンする予定です。

実際に展示できるかどうかは、地元の方々の協力が得られるかどうかにかかっています。祭礼委員会をはじめ、役場や地域の皆さんが全面的に協力してくれることが何よりもうれしく、ありがたいことです。

国立歴史民俗博物館准教授
博士（文学）

松尾恒一さん

まつお・こういち